

不死鳥と蛇の匣

壁 | ㄐ°)チラッ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ビルドロスとシンフォギアXDオリジナルCD発売でテンションMAXハザードオンな状態にガンダムUCが混ざったカオスな一品

苦手な方はブラウザバック
好みの人もブラウザバック

目次

転生者トツキブツとの出会い	1
鳥自己紹介タイム	4
鳥不死鳥を纏う	7
情報多過	11
手札は多いことに越したことはない	15
剣叔父問答	17
神は死んだ	20
銀河の果てまで行けよガンダム♪	24

転生者トツキブツとの出会い

「お前が小鳥緋那か？」

「はい私が小鳥緋那ですけど何かようですか先輩？」

「ちよつとこい」

「え！ちよつ?!まってまってまだ心の準備が」

「いいからはやくこい！」

そう言つて赤っぽい髪の毛の先輩に引つ張られどどん人気のない場所につれていかれる

「何ですかなんなんですか私にエロいことするんですか！レ○プですか！輪○ですか！」

「んなことするか！」

「じゃあなんなんですかカツアゲですか！恐喝ですか？」

「あつーもう！いいからついてこいって！話があんだよ！」

「じゃあみんなの前でいいじゃないですか」

「ちつと言えねえことだからな

あ 言つとくがこれか行くとこもそこで受ける説明も国家機密だから口外したら怖い目にあうから気をつけろよ」

「ヴえ!？」

待つてくださいよそんなの嫌です嫌ですから離してください！」

「とりあえずついてこいって！」

私の反対も聞かずどんどんつれてかれて気づいたらスゲーイハ
エーイエレベーターみたいなのに乗ってついたので

パンパンパンパン!!

「小鳥緋那ちゃん！ようこそ二課へ！」

「ふえ?」

「はあ」

「てなことがあったわけですよエボルト」

「いやいや何がてなことだはつきりしつかり説明してくれ」

「え？エボルトなら理解できません？」

「おいおい俺だつて神様じゃねえんだむりだ無理」

「ちっ」

「おいなんだその舌打ち！」

「えゝそんなことしてませんよ？」

まあ説明めんどくさくなつたので意識しますとね？

なんか私の歌に特殊な音域？周波数？があるんでノイズ倒すシステム使えるからそれ使つてノイズ倒そうぜつてお誘いを受けたんですよいやめんどくさいしまあお店のこともあるので明日返答するつて納得してもらつたんですけどね？」

「おいソレつて俺に話していいやつか？」

「あ箝口令があるつて言われました」

「おい！やばいだろ！俺に話したことバレたら俺の正体とかお前の正体ばれたくないだろ!？」

「いや私は構いませんよ？そもそもバイオセンサー作ったことばれましたし？このナシタで下宿もといい成人男性と一つ屋根の下同棲してるのも知られてましたし今さら私が転生者つて知られてもこの世界のこと知りませんし」

「ふざけるなよ！ここの地下！パンドラボックス！フルボトル！ビルド！バレたら大変とかそんなもんじゃないだろ!!」

「イヤーエボルトも感情的になりましたよねそれもかなり激情的というかすぐ表に出るタイプ」

「はあ話の逸らし方が露骨すぎやしないか？」

「そうですか？」

まあいいですどうしましよ奏者やっつていいですか？」

「奏者？」

「ノイズぶつ飛ばし屋さんのことですよ」

「ああそれなら問題ないぞこの店客なんてあんまし来ないからな」

「そうですね閑古鳥がいつも合唱してますもんね

じゃあオツケーもらつたつて明日言つてきますか」

「ヒナお前一言多いよな」

「そうですね？まっ明日も学校あるんで寝ますねお休み石動さん」
「お休みヒナちゃん」

そう言うと私はカウンター席からはなれ地下の研究室兼私の部屋
へ眠りに行った

烏自己紹介タイム

んでもってそんでもって翌日の放課後

現在特異災害対策機動部二課に来ていますめっちゃヤヴァイ何がヤバいってエレベーター入り口にただ者じゃない優男風の人がたつててざっと見渡しても昨日の先輩と多分相当鍛えてる青い髪の人

机を挟んで斜め前におっぱいおっとかにも頭の下さげな白衣の人そして目の前に一番強そうな赤いシャツ着たガチムチさん

「でいきなりで悪いが昨日の答えは出してくれたかね？」

「はいやってやりましょうその奏者とやらを」

「本当にいいんだな命を掛けて貰うことになるぞ」

「なに問題はないですよ惣一さんにはナシタ以外でバイトするつて言ってますし二、三ヶ月出かけて戻らないなんて何度かしてましたから」

「後悔はないんだな」

「はぁいい加減執拗いんですよ命はって自分の後ろの人たち守る力があるならそれを手にするチャンスなら私は迷わず取ります掴み取って見せます」

「わかった執拗く聞いて悪かったな

ではまずこの書類の山に目を通してくれ」

目の前につまれる十数センチは有るんじや無いかとおもうその紙束そしてその一番上の部分を見れば専門用語と分かる単語が大量に羅列され一部英語ではなく独逸語なぜ？

「あのくすみません一ついいですか？」

「なんだね」

「何でアルファベットが英語じゃなくてドイツ語？それにここに大量に羅列されている専門用語の解説は・・・」

「ああそれなら」

「はいはいそれならこの私！天才櫻井了子が受け持ってあげましょう」

「わー！了子さんヤツサシーよっ！天才！！才女！！おっぱいおつきいね

!!

「いいい！いいい！って胸は関係ないわよね？」

「ちっ」

「あれ今舌打ちしたわね！」

「いやその大きなお胸にダイブしながら読んだら頭に入るかな〜ってついでに分からないところもすぐ聞けますし」

「んーちよつと欲望に忠実なのはいいけどあんまりそうやってところ構わず吐き出しているとほら」

おっP・・櫻井おっんっん櫻井さんはそう言って目線を動かした

その先には自分の胸を大事そうに抱えていた少女が二人と多分成人女性（20代前半かな？）がいた

「あ 昨日私を拐った先輩にガチムチ赤髪の後ろで気恥ずかしそうにしてた青髪つ娘じゃん昨日ぶりですね〜」

おつとショートカットヘアさん自分がハブラれたみたいなお顔しないでちゃんと顔は覚えてますよ大丈夫大丈夫安心してセクハラはないからナニ信用ないのそうならこの赤いシャツ着た人に掛けてなにもしませんよ」

そう言うとき少し警戒を解いたかのように組んでいた腕を下ろす

「ところで皆さんのお名前って何ですかね？昨日クラッカーを打たれて宴会擬きそしてシンフォギアシステムのさわりの解説奏者のお誘いで終わってしまったって名前聞きそびれちゃったんですよ良かったです改めてお名前教えてもらってもいいですかね？」

そう私がお願いと皆『あつそう言えば』見たいな顔した

やつぱり自己紹介してないじゃん！こつちだけ情報ダダ漏れじゃないですか

「とりあえずもう知ってるかも知れませんが私は小鳥緋那って言います好きなものは平和と睡眠嫌いなものは理不尽な暴力よろしくお願いますね」

とりあえずこつちから言っちゃえば相手も言いやすいよね作戦決行である

「あ？そうだったか？そいつは悪かったなアタシは天羽奏ってんだよ

ろしくな」

「えつと風鳴翼ですよろしく」

「私は友里あおいよよろしくね」

そして後ろの入り口から

「ボクは緒川慎治と言います」

そして前から

「私はさつき言っただけれど流れにのって櫻井了子よ

この二課の技術部門を担当してるわ」

「というのは話題のシンフォギアとやらも櫻井博士の開発で？」

「エグザクトリー！その通りよだからここにいるのよ」

「そして俺がこの特異災害対策機動部二課の指令の風鳴弦十郎だ」

「おー指令自らこんな小娘に説明してくれるんですかそれはそれは恐縮ですね感謝しなきゃですかね」

「いや今から君になってもらうシンフォギア奏者は対ノイズの切り札とも言え得る代物で君にも命を掛けて戦場にたってもらうことになるなにも感謝や萎縮するようなことはない」

「そうですねかそれでは皆さんこれから迷惑をかけるかも知れませんがまあよろしくお願いします」

「こちらこそ頼んだぞ」

そして了子さんに説明受けつつ資料を読破し契約の類いを処理し
終え帰る頃には太陽は沈み月が上っていた

鳥不死鳥を纏う

「エボルト今日は遅くなります」

「了解だつてもなんだ？ 奏者とやらの訓練でもやつてくるか？」

「まあ今日装着実験なのでバイタルデータを取ったり色々あるみたいなんですよ」

「そうかなら頑張つてこい」

「ええ行つてきますね惣一さん」

「行つてらつしやいヒナちゃん」

そう少しの会話をして私はリディアンへ登校した

そんでもつてうんでもつて放課後

「おい小鳥いるか！」

「はーいここですここ」

「うつしじゃあ行くか」

「はあ天羽先輩もう少し静かにできませんか？」

「なにイツてんだ？」

「いやもういいですそれより行きますか皆さん待たせても悪いですし」

「そうだなじゃあ行くか」

そうしてエレベーターまで互いに無言となつて歩く

気不味いが私たちの関係は機密が多いので無理して話して漏らす訳にもいけないので結局無言となることには耐えられないので少し質問する

「ところで天羽先輩今日は何時くらいに帰れる予定ですか？」

「あ？ そうだなお前の頑張り次第としか言えないな」

「私の頑張り次第ですか」

「そうだよまっアタシも最初スゲー時間かかったからな時間掛かってもアセンじゃねえぞ？」

「ええ解りましたじやありラックスしながら頑張らせてもらいます」

「そうしなつて一応アタシも翼もついているからなんかあれば対応する

「からさ」

「それはとても頼もしいですね」

そんな話をしてるうちにエレベーターに乗って指令部に着く

「やっふーヒナちゃん来て早々悪いけど脱いでちようだい」

「はっ」

「了子さんちよつと言葉たんねえよ」

「うふふわぎとよわざと」

ヒナちゃんとりあえずメデイカルチェクから始めるからこれに

着替えてちようだい」

「はあそう言うことですか解りました更衣室はどちらに？」

「こっちだ着いてきな」

「じゃあ私は先言つて待つてるから奏ちゃん案内よろしくね」

そう言つて私は櫻井さんからもらった検査服を片手に奏さんに案内され無事着替えて検査室にたどり着いた

「さあ昨日書き手もらった書類に投薬の可能性って書いてあったのは覚えてるかしら？」

「ええリンカー？でしたか？」

「そうよよく覚えてたわね」

「よしっ！ご褒美に胸元ダイブさせてください」

「いいわよ」

「えマジですか！」

「マジよマジさあ目を瞑って飛び込んできなさい」

「いやっす！行きます！へっす」

そう言つて飛び込んだのはいいが硬い妙な温かさがあり筋肉質のよ
うな固さである櫻井さんの外見からは想像できない

「櫻井女史櫻井女史つかのことお聞きしますがパッドですか？」

「やあね天然よ」

「にしては硬い」

「硬くて悪かったな」

「この声はもしやして」

「ああ俺だ」

「指令じゃないですか！櫻井さん!?約束と違いますよ！」

「あら？いつ『私の胸』なんて言ったかしら？」

「畜生！畜生！」

「でそろそろ本題に移ってあいんだよな？」

「私は問題無いわ」

「あ はいはい茶番が過ぎましたねで検査服に着替えさせたつてことはあれですか？早速投薬チャレンジですか？」

「あらそんなことしないわよまずはシンフォギアシステムに触れる前のバイタルデータを取っておくのよ」

「わー電極がいっぱいついてきそうだなー」

「そうねだからブラ外してあるわよね？」

「ええもうノーブラノーパンですよ脱がしたらいつでもどこでも夜戦開始できますよ」

「つて言ってるけど弦十郎ちゃんどうする？」

「いや俺にはそういう趣味はないし手を出したら不味いだろう」

「はっはっは指令さんや何を本気にしてるんですさすがにパンツははいてますよ」

「つてことはブラは外してあるわよね？」

「ええ電極つけるなら金具危ないですし」

「よしじゃあやっちゃうわよ」

「よしさっさと終わらしてかえります！」

そして私は了子さんに電極をペタペタと貼り付けられるとなんか赤い石？宝石？みたいな物の前につれてこられる

「じゃあ私がオツケーつて言ったらテキストに歌歌つてちょうだい」

「え？適当に歌ですか何でもいいんでしょうか？」

「ええ歌いやすい歌で大丈夫よそれでそのシンフォギアと繋がって頭に聖唱っていうのが浮かんでくるからそれを歌つてちょうだい」

「へえー思ったより楽ですねもつと血とか何か体液を垂らすとかすると思っただんですけどね」

「そんなことするわけないじゃない悪魔との契約でも無いのに」

「そうですよね〜でこのシンフォギアの中身ってなんなんですか？」

「フェネクスよ」

「フェネクス？不死鳥？火の鳥？完全なる生命の具現とも言われているフェネクスですか？」

「あら思ったより知ってるのねそうね正確には不死鳥フェネクスの羽を使っているわ」

「うげえ」

「？何か不安でもあるの？」

「いえ何でも」

「そっじゃあこっちは準備できたから歌ってちょうだい」

「了解であります」

「それでも何を歌おうかフェネクス、不死鳥、鳥うむ思い付かないいいや」

空を見よ 今宵は

星辰が 揃う夜・・・」

私適当に歌っていると目の前の石が光だして頭の中に何か歌詞のようなものが浮かんび私はそれを唱えた

情報多過

ペンダントから光が溢れてくる

私の体を包み込みインナーを形成し装甲がついて行く

見たことがある金色の装甲これはフェネクスだ

光が収まった後確認のために自分の四肢を見る体の至るところを確認する

やはりだユニコーンガンダム3号機フェネクスがそこにはいた

相違点としては二の腕や太もも、腹部、間接部など一部装甲がない程度頭部はサイドパーツがヘッドギアのようになりバルカンもそこに着いて角はある

一通り確認がすむといきなり頭に大量の情報が流れてきた

「うぷっ

オロロロロロロロロロロ

吐いた情報量に耐えられず吐いたヤバい

「バイタル値安定範囲内です」

「脳に大量の情報が流入しています」

「了子さん小鳥君は大丈夫なのかね？」

「うーん今までには無い生体聖遺物からの作成だったしそこが原因かしら？」

とりあえずヒナちゃんシンフォギア脱いでくれる？」

「オロロロロロロロロロロ」

「本当に大丈夫・・・なんだよな？」

「了子さんボスケテ」

そうして私は意識を手放した

——少し時間がたって——

「んぬ」

「小鳥君無事かね？」

「うにやおー指令じゃないですかおはようございます？」

とりあえずお水いただけませんか？」

「ほらゆっくり飲むといい」

「いやすみませんね実験の最中嘔吐した上で気絶とは
「気にしなくていいそれより体の方は大丈夫か？」

「ええ大丈夫だと思いますよ

心配なら精密検査でもすればいいじゃないですか」

「ふむそこまで喋れるなら大丈夫のようだな」

「あもしかして精密検査したんですか？」

「ああ」

「いやん指令私にスリーサイズ知られちゃったテレツ」

「はあ本当に大丈夫のようだな

すまないがすぐ着替えて指令部に来てくれ」

「なんかありました？もしかして指令何か如何わしいことを」

「君の倒れた理由と今後の扱いについてだ」

「了解です了解じゃあ着替えるんでちよつと待ってくださいね」

「いやまてつくれ俺が出てから着替えてくれさすがに他の者に見られ
ては」

「別に気にしないんで指令部に行くにも早い方がいいんでしょ？なら
時間の無駄です私は恥ずかしくもないですしなんなら後ろ向いてて
ください」

そういうだけ言って私は検査服から側にかけられていたりディア
ンの制服に着替える

指令は律儀に後ろ向いてたよチラ見すらせずに

「着替え終わりましたさっ行きましょう」

「ああ分かったからくつつかないでくれないか」

「嫌ですねこうやって指令の如何わしい噂を流します」

「おいしい加減にしてくれ」

「もーつまんないですね」

そんなことを言い合いながら歩いて行けば指令部につく

「おきたわね」

「来ました」

「大丈夫か小鳥？」

「大丈夫ですよとは言えないかもです」

「おい!どうした!」

「精密検査の結果次第ではってことですよそんなに慌てなくても」

「その通りだ早速で悪いが了子くん」

「ハイハイそれじゃあ説明をさせてもらおうわ」

端的に言えばヒナちゃんが吐いたのも気絶したのもシンフォギアシステムからのバックファイアと考えられます」

「櫻井女史質問をしても?」

「いいわよ翼ちゃんにかしら?」

「バックファイアは全身に負荷がかかりその身を傷つけるはずですがし
かし小鳥の体は健康そのもの

これは一体どういうことでしょうか」

「それはね」

私にもわからないの」

「「「わかんないのかい!」」」

指令部にいるシンフォギア奏者三人プラス指令からの突っ込みを受けつつ了子さんは説明を続けていく

「だって翼ちゃんの天羽々切や奏ちゃんのガングニールは神器という武器から作ったシンフォギア対して今回ヒナちゃんがまとったシンフォギアの元のフェネクスは生物なの

そもそも生体聖遺物自体ガングニールとかなんかの神器いいえここでは無機物と言った方が適切ね無機物の聖遺物と比べてものにならないくらい風化や腐食が激しいのよフェネクスという今まで無かった生物つまりは有機物のシンフォギアという特殊な事例のためにバックファイアもほか2つとは違った形で出たと推測されるわけ
理解してくれた?」

「つまりは元がほか2つとは違ったからバックファイアの症状も違ってた?」

「なんとか」

「とりあえずヒナのが特殊なくらいは」

「リンカー打てば緩和できそうなくらいまでしか」

「まっヒナちゃんのが今回の答えに一番近いかしらねってことで弦十

郎ちゃんヒナちゃんいいかしら？」

「小鳥君が納得してくれて万全のバックアップができれば」

「とりあえず薄いのからお願ひします」

「もちろんそのつもりよまあ今日は初装着で疲労もたまってるでしょうから帰ってもらって調整は明日からになるわ」

「分かりました今日はもう帰って寝ます頭使いすぎて眠いですしね」

そんなこんなで私はリンカー頼りのシンフォギア奏者となった

いや正確には明日から調整とか訓練でで多分実践配備は一ヶ月位かかるんだろうけど

手札は多いことに越したことはない

「エボルト今夜空いています?」

「ん? どうした急に」

「いえ、そう言えば私変身一回しかしてないじゃないですか」

「ああそうだったな確かちっこい頃に変身してるんだっただか?」

「ええ幼少期にノイズに襲われたときに一度だけ」

「それで、それがどうした?」

「いえね奏者として戦うことになりました、けど手札はひとつでも多い方がいいじゃないですか」

「まあそうだな」

「そこで私に合うボトルを探すの手伝って欲しいんですよ」

「ほう、よくラビット使って遅刻ギリギリで学校いつてるやつが何を言ってるんだ?」

「いやいやラビットはなんかしつくり来ないと言うか歯車が違うと言
うか」

「つまり何だ? お前ドラゴンでも使いたいのか?」

「いえちがいますよ私は変身するに当たって何が一番体に合うか確か
めておきたいんです」

「だから俺に手伝えと」

「イエスですな」

「じゃあどうやってやるんだ? まさかひとつずつ確認してくつもりか
?」

「いえベストマッチで探して片方づつって考えてます」

「それでもしバットやキャツスルだったら?」

「スマッシュにでもなりますかね」

「ほう 面白い! とりあえず今晚からでいいんだなしかし一晩では終
わらないぞ?」

「それは大丈夫ですよビルド、クローズ、グリス、ローグと順番に変身
していこうかと」

「そうするとビルドが一番ながそうだな」

「いえラビタンだけですよ？」

なに勘違いしてるんですそれ言ったらグリスなんて強化ホーム死ぬじゃないですか」

「それもそうだったならホレ」

そう言つてエボルトはブリザードナツクルとノースブリザードフルボトルを投げってくる

「殺すつもり!? ねえ!? 私しぬの?」

「バカだなヒナお前人間止めてるだろ?」

「それもそうですけどなんでブリザードにならないといけないんですか」

「俺のカンだ」

「黙れ万丈!」

「まっ冗談だよ、そもそもハザードレベルが足んないからな」

「へえ私のハザードレベルってさういえばいくつなんです?」

「4・2だ」

「うわ半端だ」

「ハザードトリガーつかうか?」

「エボルトってちよくちよく私殺しに来てません?」

「まっヒナが死ねば俺は自由だからな」

「別に私あなたを拘束してるつもりは無いんですけどね」

「意外としてるぞ?」

「具体的にどんな風に?」

「まず一番はトランスチームガンとドライバーだあれが使えんと変身すらできない」

「あー それなら 一体いつから私がトランスチームガンを規制しているって錯覚していた?」

「はあ!?!」

「実際変身ベルトだけです? 規制していたのは」

「ふざげるなあー!」

「うるさいです」

そう言つてエボルトの意識を刈り取った

剣叔父問答

薄暗い部屋のなかに数人の男女がいた

「小鳥緋那

今回第4号聖遺物フェネクスのギア奏者になる少女についての報告を開始します」

そうサングラスをかけたスーツの無個性な男が声を発すると周囲の人影はうなずくような動作をする

「まず彼女の現状ですがリディアン音楽院一回生

成績は文武両道と言つて良いほどに良好

友好関係は広くなく休み時間にはもっぱら読書か睡眠をしているようで自ら人に話すことは珍しいとのこと

家族構成は一人っ子、幼少期も外に出て遊ぶなど年相応の活発性はあったもののやはり読書が好きだったとのこと

そして何よりノイズに襲われて生き残ったはじめての人類として一部界限ではやはり名の通った少女です」

「そして、その時に両親は共に無くなってしまっている」

「はい

そして現在は遠縁の石動惣一氏が営業するカフェナシタに住んでいます」

そうサングラスが一区切りし

白衣の女性が前に出る

「ここからは前の装着実験で起きたバックファイアについて技術部の櫻井了子が説明させていただきます

まず前の装着試験の際に起きた体調不良についてはあそこにいる人たちには一旦バックファイアとして説明させてもらったのだけども

小鳥緋那、彼女自体適合係数は翼ちゃんと同等かソレよりも上よ」

「ならばなぜあのような自体になったんだ？」

赤いシャツを着た男が質問をする

「それは深層心理 シンフォギアのイメージ反映が悪く作用したとし

か言えないわ

彼女がバイオセンサーという聖遺物一步手前のトンデモ技術確立、生産したことは資料でわかっているでしょ？

そしておそらく彼女の脳内にはその先の設計図があるとみていいわ

そしてその設計図をシンフォギアがイメージ反映した結果

周囲の情報を脳に直接フィードバックしたとみて間違いないでしょうね」

「ちよつとまっつてくれそれは大丈夫なのか？」

「精密検査の結果脳にはなんら支障はなく寝起きで弦十郎ちゃんと会話できてたし今のところ問題ないわ

まあソレを押さえるための方法も無くはないわ」

「まっつてくれリンカーを使えば適合係数は上がるのだろうか？」

赤いシャツを着た男性が疑問を口にした

「ええそうよ」

「ならばその脳へのフィードバックは激しくなるのではないか？」

「そうねそうなるのは想像に難くないわ

そしてここで登場するのがリンカーと相反するアンチリンカーよ」

「二「アンチリンカー？」」

複数人の声が重なる

「そうアンチリンカー 簡単に言えばリンカーが適合係数をあげる薬ならアンチリンカーはソレを下げる薬ね

無論戦闘に影響が出ないよう調整はするわ」

「しかしいくら影響がないとはいえ適合率は下がるということは戦力の低下を意味するそれはどうするつもりだ？」

「そこは翼ちゃん達と協力、連携をとって貰うしかないわそれで他質問ある？」

「その事を本人には伝えない方がいいだろう」

「リンカーと偽って通すしかないと思うわこれについては」

「アンチリンカーの汚染は？」

「奏ちゃんと同様ちゃんと除去するわよそこは技術者として信用して

欲しいわ」

「よしそれでは今回の第4号聖遺物フェネクスのギア奏者小鳥緋那についでの方策会議を終わるいな！」

「はいー。」

薄く暗い部屋のなかに響く声と共に人影は散って行き残った赤いシャツの人物が誰へと言うでなく呟く

「いくら両親の仇としてもあの子は歪だ・・・」

神は死んだ

「ナシタ地下研究室」

「さあやりますか」

「ヒナよおさすがに騒いだ俺も悪かっただかな」

「なんですエボルト五月蠅いですよ静かにしてください」

「いや起こし方がな」

「え？何か問題ありましたか？」

「熱々コーヒーを顔面しかも鼻の穴めがけて流すのはやめないか？」

「いいじゃないですか別に貴方その程度で死にはしないでしょ？」

「あのなあ」

「そう言い両手で顔を多いながら点をあおぐような格好をしている
エボルトを他所に私はビルドドライバーをつける

「行きます！」

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

Are you ready?』

「変身！」

『鋼のムーンサルトラビットタンク！イエーイ』

「どうだヒナ？」

「うーんやっぱりなんかちがうんですね」

「じゃあ次だな」

「ですね じゃあ！」

「そしてフルボトルを外しクローズドラゴンにフルボトルをセット
『ウェイクアップ！クローズドラゴン！』

Are you ready?』

「変身！」

『Wake up burning! Get CROSS—Z D

RAGON!』

イエーイ』

「でドラゴンも駄目か？」

「ええピンと来ないですね」

「はあこれでトライアルの組み合わせだったら面白いんだがなあ」
「うわやめてくださいすぐ嫌ですよそれどれだけ時間かかるんですか」

「一フォーム30秒として大体7・8時間程度か？」

「それ無機物有機物の組み合わせで計算してますけど有機物有機物だったり無機物無機物だった場合その三倍以上かかりますよ」

「まっそこにロストフルボトルも入るわけだからさらに倍プツシユだ」

「戦う前に死んでしまいますよ」

などと話ながらもビルドドライバーを外しスクラツシユドライバーに付け替える

「あーもうなんかなあ」

「どうした？」

「貴方がさつき第六感とか言ってたの思い出したんですよ」

「はっそんなの気にすんなよたっく」

そう言いながらこの腐れマスターさん鼻をほじってる死滅させてやろうか本当

なんて思いながらスクラツシユドライバーにロボットゼリーをセツトする

『ロボットゼリー』

「変身！」

『潰れる！流れる！溢れ出る！』

ロボット イン グリス!!ブウラアアアア！』

「ん あれ？なんか今までより一番しつくりくるんどすけど」

「ヒナおめでどうお前グリスなんだな ハツハツハこれは傑作だ」

「やめろおお！→」

そうしてエボルトと漫才をしていたら急に目眩がしてきた

なんか今日私倒れてばっかりじゃん

「おい!?ヒナ！大丈夫か」

「ええエボルト一応大丈夫です」

ええすこし神ってやつからのプレゼンツがヤベーイだけですから」

「お　おうそれならいいが・・・」

「嗚呼もうこの記憶もうちよつと先にくれませんかね本当」

「どうした？」

「いえ私の初世？まあ最初のそこら辺にいる野郎だった記憶が戻ってきたんですよううう　つらいこんな変態思考だったとか死にたい」

「ほれ」

「トランススチームガンを渡してこられても」

「死にたいんじゃないやなかったのか？」

「冗談を」

そんな混コントしてると

ボムツ！

とドライバーにセットされているロボットゼリーから手紙がでてきた

「なんだ？」

【拝啓転生者様

私はあなたを転生させた神の使いです

今回は適合する成分での変身おめでとうござ
います

さてここからが本題なのですが転生し続ける
前の記憶が戻ったかと存じますそれは適合す
る成分で変身した際に戻る仕様ですもし時期
が遅かったなどと言われましても当方は一切
の責任を負いません御了承ください

さらにエボルトの能力規制を強化させていた
だきました今転生世界の主人公にエボルトの
遺伝子の一部を移しておきましたのでビルド
本編のようにフェイズを踏んでパワーアップ
してください

さらにベルトやボトル等変身アイテムを仕舞
える異空間の付与をいたしましたこれでベル
トを常時持ち歩くことが可能となります

要件は以上ですあなた様の益々の御盛栄を

願っております】

「は？ふざけんなファツキンゴツド冥府に落ちろ」

「おいおいこいつはマジかはあまためんどくさくなりやがった」

そこには手紙を持ってプルプルと震える少女とどこか楽しそうに笑っている男がいたそうだ

銀河の果てまで行けよガンダム♪

「小鳥さん起きて」

「あと2300秒寝かせて」

「それじゃあ廊下の天羽先輩にそう伝えてくるよ」

そう言っただけで我がクラスの委員長殿はテトテトとドアに走っていった

うんちつちやいんだよ委員長殿は可愛いんだよ委員長殿はある種の合法ロリなんよそんな容姿もあつてか委員長投票で圧倒的に信任されたと言う経歴を持つ

今は関係無い話か寝よ

「おい緋那お前今日は大事な日だろお？早くいくぞ！」

「ぐえ ちよつまって苦しい苦しいですって

下ろして自分で歩くから下ろして」

奏さん他学年の教室なのにずかずか入ってきて首根っこ捕まれて持ち上げるってひどい

て言うかよく持ち上がるな私決して軽くないと思うけど

「離してください奏さん」

「じゃあ自分で歩け」

「嫌です今日は休みます」

「残念ながらそんなことはできねえよ」

「なんでなんです」

「訓練だ 昨日説明しただろ」

「ちえ」

そんなこんなで訓練所につれてかれた

『緋那くんとりあえず君用に調整したリンカーを使ってもらう体調が悪くなったらすぐに言ってくれ』

ガラスの向こう側計測してる側にいる指令、奏さん、翼ちゃん、了子女史安全マージンは完璧ってことですかめんどくさい

「シレーめちゃんこ眠いでーえす」

『そうか問題ないなじや始めるぞ』

「あるえ？おかしいですよ指令！寝不足はいかんでしょ？数値的にも」

『大丈夫だ出撃、仮眠、出撃なんてこともある多少の寝不足は許容範囲内だ』

『そーよ緋那ちゃん貴女まだわかいんだから二徹位平気よ』

それに技術屋ならもつと連日徹夜したことあるでしょ』

「指令も了子さんも厳しい泣ける」

『まあそういうこつたなんかあったらすぐ助けるから安心しろな緋那』

「え？奏さんに？それは遠慮しときます」

『なっ!?なんでだよ!』

「だつて雑そうだし」

『んなどこあるか!』

「そこんとこどーなんですか翼ちゃん」

『え、えくとその』

『翼あ!?!』

「ツーコとで後はどーにでもなーれ!」

とまあ後先考えるのは何か起こってからでいいや考えるのめんどくさいし

そう思案し私はリンカーを打つてから聖詠を詠う

蒼い炎がペンダントを中心に燃え上がり私を包む

炎が装甲になり頭部にギアが形成されバイザーが降りてくるこれでフェネクスの完成である

「フェネクス装着完了』『次はなにします?』

『バイタル安定脳波異常なし』

『出力安定しています』

「指令ー了子さん次はなにすればいいですかー指示ぷりーず」

『とりあえずなにもしないでギアが解除されない程度に歌っててくれるかしら』

「りよーかいでえーす」

頭に流れてくる歌をうたう

暇である武装の説明とかないのかね？

というかこの前みたいに気持ち悪くならないやっぱりさつきのお薬のお陰かうむ気分が良いなんなら赤くて青いエナジードリンク飲んでときみたいに翼がある感覚だ

そう今なら飛べるとこまでだって飛んで見せる銀河の果てまで！

『ちよつとヒナちゃん!』

『止まれ!おい!ヒナ!!』